

911.3

ハ

3

再撰貞享式

日之

意句此事

此はしく我々の意にてもうと天の厚徳の御より  
いふの事や我ははこつらうと大和を我をこゝろに  
いづくの帝に撰はるしと云ふ事や御より  
あはれに連るは西式より誹りあはるる  
まゝ一毫の詞と云ふ事や御より  
はるまじきこと我々の詞と云ふ事や御より  
あはれに御よりあはるる事や御より



始として治部所傳の各目よりし書句の意の  
 違事其ある所を例の詞と出さるるは  
 他より意とる可く推しよるものなる  
 一と意とに隔のる事より一と意とに隔  
 りしにるる物の傍りあるものより一と意と  
 同しとてしきりし意と一と意と推しよるあり  
 たりと申すは此語の以るをの事より下事  
 所より出さるる二句ありしより一と意と  
 一と意と一と意と一と意と推しよるあり  
 連なり此語の詞一と意と推しよるものと  
 一と意と推しよるものと一と意と推しよるものと

こととれいざとて揚如き事あるはおのり  
 毛ありしより一と意と一と意と推しよるあり  
 ちりりと公の能活しし意とあるは一と意と推しよるあり  
 右おのりし語の詞とあるは連なり此語の詞とあるは  
 ちりりと公の能活しし意とあるは一と意と推しよるあり  
 の事しきとらるる事ありしとて一と意と推しよるあり  
 たりと申すは此語の詞とあるは連なり此語の詞とあるは  
 ちりりと公の能活しし意とあるは一と意と推しよるあり  
 一と意と推しよるものと一と意と推しよるものと一と意と推しよるものと

東老と云△再撰するに意の一條の式の大なる









ね和の二角ありて他諸よりよき各目なれに季  
 に入れては之を季と用ひて之を季と末葉草  
 とより節供の名目とありて秋に植物  
 のま嫌おぬく畜季とてつるは蛇か  
 ねと末然のらねとよ一変を鮎と魚の  
 こまて古抄のま季の句論とて魚よ上下  
 のてまよとつり鮎よみとて魚とらむる  
 とらひ鯖よとつてま秋のまよのあねと北  
 首法よりつり時とてはよよまよとてつれも  
 一用ひてはねもやのまよとてらねと冬に  
 のねなれつれもまよを月とてて四まよ北  
 夏よとありきりしりれとまよもらまよと  
 秋よありはまよとて冬よありはて諸社の臨時  
 のまよと名目ありは満なれまよとてんまよと  
 此用やまや貴賤よとてり寒暑よとつり礼よ  
 此まよと和よありて節供節日のまよと他諸  
 よま多用なれにねと二世の象談よとてつり  
 こまよのまよはねとてつりまよよ用ひてひまよ  
 他諸の用ちらとまよなれに春よとてまよと古抄と  
 冬よとまよなれとてらねと名目のねとつり

のねなれつれもまよを月とてて四まよ北  
 夏よとありきりしりれとまよもらまよと  
 秋よありはまよとて冬よありはて諸社の臨時  
 のまよと名目ありは満なれまよとてんまよと  
 此用やまや貴賤よとてり寒暑よとつり礼よ  
 此まよと和よありて節供節日のまよと他諸  
 よま多用なれにねと二世の象談よとてつり  
 こまよのまよはねとてつりまよよ用ひてひまよ  
 他諸の用ちらとまよなれに春よとてまよと古抄と  
 冬よとまよなれとてらねと名目のねとつり





二用ありて能活とて各同あれ二句の衆  
評とかくのそとて一世の衆評と定規しておけ  
たにまよひ打ちて也冬やと書るとかく新制衣  
多る〇今梅まらに古法より裕らひ懸るとい  
とい海米とらひ多しと書るといふれと二句もあれて  
まゝ時と冬と此各同して今式とてとて通  
也ふれとてけれと二まの二季四季よりこれ常供  
と新とて古例よりりて一句を多れてある時を  
同季とて句をよゆるともまやみ句はく地ひみ自  
りりて二句はくるとも句をよゆとて也〇能活もは

者法の中より而もとつし掛はとて川物し能活  
和歌連寄此古法よあゝと能活よ今式の衆評  
あれいけ口を常供の例とかりて一句を多れてあ  
時を波子難しあゝと方む分りよと句を多れてあ  
あんとまゝとあゝと書は二句に能活よ多用あれと  
冬に古法いはるるもよして去嫌いと句よとてと  
はらく一雁の用と結まけ式ハおぬく新制と似れ  
と全く古法の例あゝとあゝととてとて二種の  
衆評より一世の衆評と定規して用ると用せらる  
と例よと人の様書よとてとて



と新とて。こゝに取とてきつぬ。○又と朝日此  
 以燈より裕單し物。扇團。扇團。水とむき。あし。詞と  
 共へて。古抄より。さし。ま。これと。し。れ。の。後。涼。と。稱。され  
 へ。こ。し。詞。も。又。さ。ん。左。抄。を。用。と。新。も。これと。さ  
 ら。後。句。も。ま。向。し。ま。ま。と。船。造。の。ま。話。と。れ。い  
 三。れ。と。と。兩。用。の。才。一。と。い。ふ。む。川。持。ま。て。二。才。ま。ま。後。り  
 て。中。遊。の。對。を。れ。い。ま。ま。ま。し。新。も。用。と。さ。せ。○秋を  
 灯。燈。と。ふ。れ。あり。ゆ。ゆ。れ。と。決。て。ま。ま。の。年。式。と。れ  
 灯。燈。と。い。ひ。ひ。り。と。と。ま。ま。も。新。も。用。一。一。燈。燈  
 と。も。成。放。け。と。と。秋。と。は。と。ま。り。て。も。と。放。と。と。い

例の二用とて。こゝに中遊とて。詞。い。は。ち。り。川。持  
 の。名。お。あ。ま。ま。向。の。新。と。句。端。と。ま。ま。秋。の  
 一。用。の。も。と。例。の。多。議。と。ま。ま。と。さ。せ。○冬を  
 團。扇。裏。より。燈。火。と。は。い。て。ま。ま。と。古。抄。と。お。ふ。と。し  
 二。の。貧。富。の。兩。用。と。い。ふ。時。と。は。と。と。お。方。も。か。ま。る  
 ま。一。欄。と。か。り。冬。と。あ。ま。ま。山。家。此。用。と。新。と。さ。せ  
 燈。火。と。ま。ま。一。と。ま。ま。の。才。と。と。言。解。子。と。句。新。と。し  
 よ。る。一。と。れ。と。意。思。扇。團。踏。皮。以。中。の。お。ま。ま。と。用  
 と。ま。ま。と。ま。ま。也。古。抄。と。ま。ま。と。冬。と。は。と。と。ま。ま。と。扇。帽。子  
 と。し。新。と。ま。ま。と。一。用。あ。ま。ま。と。一。と。ま。ま。と。一。と。ま。ま。と



とらふとありて連遊もも名と使く一々此能遊  
しとて海と新の各句をさへくの用ひて  
四季の都をさへ曲節とて一〇今梅もつた  
各所へ新の各句をさへく一〇今梅もつた  
その向來の情とて一〇今梅もつた  
とて一〇今梅もつた  
まを時のみりて

あさふらと使手ら一海を片ん

かくとて使されとての浦らの各句をさへく  
そのおりももら一使一おのちり武陵より

伊賀のゆかり馬の行鞍らちかて

からあつて杖つと坂とて是は事哉

け時をるはれの人此前のもうぬ牛もある也  
とて一〇今梅もつた  
一〇今梅もつた  
とて一〇今梅もつた  
あ一にきくよひはりて

かくはあり南ゆりてけよ改テ

け向ら花子よつたる壺解の両国とありいよを  
源由よ遠くよつたる程とて一〇今梅もつた

と扱てかくドもれハ船中と書き字ありて  
次ニありハ此用はあつとされしと新解とや  
つむむ各取ハはおも作一とおま一しりあまこ  
あつとすも及びし又あるし一老懐の詩毫一  
年くや様もまもる様の面

け句らぬりハ迎幸のこらと扱あつと扱る  
歳日の詞あつれいそと一新解とやつむむ或は  
可季格とやつむむとれハ新とのひ新解は  
つむむ可季格といふ今の新制と一つとれつと今  
の御借の名目とつむむとせ

運ニ云けはのわねい白馬の類説と相あり  
て先師の遺稿もも故在とりてと也所の人和  
り柳ハ可季格とありて軍書とく可季格といふと子  
句をいふ時の記りハ難解ありと所の詞は  
故翁と富士芳柳のく可季格一と林と一唱の  
作ありとと貞室老人此とてとくと可季格と  
はくとも各句やとせとおそろしむといふは  
ちつととも可季格の行人とと可季格と一也の可季  
と所はんと可季格と解とまら此とありてと一先師  
いけ新と扱されしと一可季格と祖翁の詞と扱は



上なるの如くは作の飛來ありては地  
 上の例の如くは新の格とありて  
 之より後水の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり

爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり  
 爲ありて海の中はありて海の新なり



の附合と繼としていひけるなり一の用とある  
物名もあまこふれい今北能譜は用なき物も  
時代の用捨にやうきとまゝしやせしむけ本を  
右今論ある物とあげて今採めざることを加へ  
一也採らざらん我にふるは達の人ありしけり  
名れと凡例とありは月之り十二月廿五日  
まゝ彼ら嘯竹と用捨て季細の亦同也  
あつてもやとせらけけ式の製法なるあり或は  
とも秋冬と二季の向はまゝきくする物い多ま  
とゆるしサまゝと加へておれと今式の加減と

い或は鉢裏と江陀といひ是若と服類とい  
おはたれと今式の例なりとい或は新舊法を  
秋とあり花の時季とまゝしやせしむけ本を  
の貴概とい或は右抄のやう用と捨て今式の  
有用とあるおれと今式の常用といふは其を  
新故のきくといひして例の古式とわくことあり  
これと温故知新とやうにまゝしやせしむけ本を  
連年二の西式より兼載京祇の控はゆるやう  
申して紹巴の又百ヶ條あり是等とあり先  
子アをといふことありは自らおぼしめし



雪解 此詞古式ヨリ解ハ消ハ春ト成セト雪  
消ハ消カハ朝夕ノ日ニ結ハ從ハ陽  
結ハ三頌ニ春ト成ハ冬ニ用ハ詞ヲ附合  
ノ旨ト成ハ時ノ之義ニ解ハ春ト成ハ消ハ  
冬ト成ハ時ハ消ハ物ニ敵ハ消ハ解ハ我ト解  
ハ故ニ冬春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ハ自在ヲ  
得ハ此等ヲ當用ハ儻トヤ云ハ此等ト冬部  
ニ新ハ及ハス

陽 此名古式ヨリ新トナリテ諸抄ニ色多説ト  
燃ハ詞ヲ添ハ比吹ハ春ト成ハ此等ト

穠毒ノ説ニ連身ノ用ニテ精敏ノ説ハ眞子ノ  
沙汰ニヤ○今將スル物ノ散面ハ散面ノ二子ヲ用  
テ同訓別用ト成スキナリ散面ハ陰ノ散面  
明ハハハノ各語ナリ或ハ散面ト云ハ類ナリ然  
ハ散面ト群及ニ散面ノ耶語ニテ和漢ノ通用  
トハ此等ノ爲ナリ或ハ庄子ノ野馬遊舞ト云  
遊舞ト陽矣ト同意ノ説ト後説ノ遊舞ト傳  
語ノ用ニ非ス増テ野馬ト云ハ野馬ノ説何俗習  
ニテ論及ニ足ラズ或ハ散面ト湯桐訓ト和訓  
ト例ノ實來ナク散面ト連歌ノ詞ト何ト



若葉

古式ニ木ノ若葉ハ甘ヌト成シヨキノ若葉ハ春ト成シ青葉ハ總テ新ト成セルヲナリ然ルヲ或抄ニ花ト若葉ノ二所ニ若葉ニ花ヲ結テハ春氏云イ甘氏云ル何故ニ決テラヌヤ○今按スニ月花ハ凡雅ニ一巻ノ飾ナレハ跨タル物ハ加減シテ四季ヲ自由ニ配シテハ若葉ニ花ヲ結テハ決シテ甘ヌト定レ○猶按スルニ世配ハ花ハ春ナリ葉ハ夏ナリ實ハ本ニリ秋ナラ其葉ニ若ノ一子ヲ結テ若葉ヲ甘ヌト成セルヨリ若葉ノ春ナレ道理ヲモ知レ然レハ花ハ春甘ヌニ跨テ花ニ郭ムヲ結タルトハ入遠タル働ニ世等

ラ加減ノ様ニ變トハ云一キナリ

残花

世詞ニ古今ノ論アリ然レハ残字ハ其季ナリ世季ニ残字ハ残ト云レ道理ナレ花ハ本ヨリ春ニ決シテ残ハ甘ヌト定レ惣シテ残葉残葉ノ類モ古式ハ一様ナラヌ故ニ汁只ハ十色ニ意ニ兼テ百世ニ論ノ漸ニ時ナレ譬言ハ残葉ハ重陽ニ残レハ残葉ハ何ニ残レキヤ残字ハ總テ其季ノ次ニ取りテ世論ヲ残字ノ例トスレ秋冬ニ部ニ奉ルニ

牡丹杜若

世ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成シ歌ニ杜若ヲ春日ト成セト中右ニ誅語ノ加減

ヨリニ各ヲ夏ニ用スルニ初夏ニ花ノ少キ故トフ

松竹落葉

古抄ニ松竹ノ落葉ハ新ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云レト松竹ハ何ニ常盤木ノ又ヤ山館

ノ月情ニ殊ニ面白キ物ナリニ只ハ決シテ夏ト定ムレ

去レト落ルトハ詩ノ詞ニ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ辟言ハ

桐葉ノ之里ク落テ彼ハ散ル姿ニ非ス多ク秋情ノ論ヲ

知ラハ千式万法モ多ク明ナルレ

水芙蓉

此名ハ新撰ナリ水芙蓉ハ和漢氏ニ秋之部ニ入レト水芙蓉ト云フ時ハ漢ニ蓮ノ一名ト

ワ然レハ俳ニ和ケテ水芙蓉ト續ス氏芙蓉ト云フ

ヲ結スルハ散ルト云フ詞ヲ倭テハ決シテ夏ニ用ナリ

秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ラヌ物ナリハナリ此類

ヲ可作ノ凡例ト成スキナリ

老萱

此式ハ全ク新撰ナリ然レ氏老萱トハ本ヨリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ狂萱氏乱萱氏總テ

暮春ノ物ナレト例ニ今式ハ加裁ナリ秋萱ハ勿論

ニテ老萱モ夏ノ名ト成サハ萱ニ老ノ感情アリ

凡雅ハ例ノ淋敷味ト云ハ此名ハ漢語ニ據ルナリ

萱附子

此式ハ例ノ當用ナリ○今接スルニ萱子ハ春葉立テ夏詞ハ六月ノ間ニ毛ヲ替テ冬

至ノ比ニ鳴習フ故ニ管ノ子ニ鳴字ヲ結テ冬ノ季  
トハ成セリナリ然レハ管ハ向習ニテ或ハ引鳥ノ  
親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引音ヲ教ヘ管古ハ管  
ノ向ナレハ附子ハ決シテ管ト云イ笛ヲ結テモ管ト  
知レ月星日ナリト引声ヲ取上ノ管トセリ

鳥巢

鳥巢ニ鳥ト都鳥トテ加テ水鳥ハ總テ冬トト  
世ニ鳥ハ歌道ノ秘古ナレハ管ニ記ナスト書捨テ  
例ノ子細モナク新ナリト云ヘリ○今持スルニ都鳥ハ  
指テ能談ノ用ニ非ス増テ秘古ナレハ論ニ及ハズ  
ト云テ管ト云レハ本ナリ水鳥ノ用アルハ巢ヲ結テハ

巢ト云スレ然レニ鳥ノ浮巢ト云ハ古式ニ新ト成セ  
夏ハ水中ノ草ニ巢ヲ擲メハ水ノ増減浮沉テ四季  
モ其後ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新トハ成セト鳥  
右巢ハ總テ去物ニテ其巢ヲ掛ル時ハ管ナレハ  
浮巢ハ決シテ管ト定キヤ巢ニ用ナキハ向作ニ  
依レレ鳥ノ別名ハ冬ニ部ニ論アリ

翡翠翠

此鳥ハ詩ニ名アリテ古抄ハ渡鳥ニ入タレト云ノ各  
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ管ニ管ト云シ川蟬トハ

沖鱒

此名ハ俗目ナリ或ハ海邊ノ別在ル或ハ船遊  
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレハ決シテ極暑ノ各同

ニテ世等ヲ例ノ貴賤ト云キナリ

冷

冷 世ニ兵ハ京家亦同ニ多ク秋ノ季ト成セルハ  
察スルニ冷字ノ惑ニヤ夏ハ涼ヲ好シ秋ハ冷

ヲ惡ム天地自然ノ道理ニシテ世等ハ夏ト決ス  
物ニテ古今ノ遠トハ天理ノ次女情ヲ論スシテ又字  
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ凡例ト知ナリ

○秋之部

花白

佛舎ニ正花ナリ春ナリ細ニ花牙段屋スル種  
ノ理屈アルト世分ニテ置カ能ナリト云ヘリ如何ナル

和古又ニヤ知ラス○今採スルニ花壇モ花白モ決シテ

秋ニ定キナリ花園ト云ハ竹花ニ似タシ花園トハ

仰向ウラムキ白トハ俯向ウラムク多ク能諧ノ次女ト云テ種々

ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス世等ヲ今式ノ有用ト知シ

桂花

世名ハ今ノ常用ナリ古式ニ春季ノ説モアトト  
地下ノ桂ハ花ノ角ナリ和歌ニモ月光ヲ讀ムル

例シテ月ノ異名ト成シ秋季ト定ルハ勿論ニテ

四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用キナリ然レハ

有明イナコヒ既望ノ名ニ例シテ月モ星モ二句去ク植物

ニモ二句去キナリ

鳥鵲橋

古抄ニ生類ニ非スト、如何鳥ニ百去キリ

鳩吹

世詞ハ種々ノ説アリトキヲ吹テ鳩ノ真似カ

紅葉散

世詞ハ古式ヨリ且散ヲ秋ト云イ散トハカリラ冬ト云レト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニ

花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ若ナリ増テ

冬散ル木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ世等

ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニ及向敷ナリ

柏散

世詞ハ傳々ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證文トシテ其意ハ新ト成セシト愛ニ散字ヲ結テハ決シ

秋ト定ヘキナリ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正諄ニ柏字ハ柏字ノ俗書

ナリトヤ去ルラ大和ノ俗習ニ柏ヲカヤト訓シ柏ヲカハ

ト訓シテ世類ノ正俗ハ教多ナレト知テ誤ニ從テラ

固凡ノ故實トハ云レ去ナカラ爾新ノ註ニ榧有テ美

實ニ而如栢トアレハ倭モ媚テハ榧字ヲモ用又榧ト

栢トハ異字同訓ト云レ或ハ傳々ノ説ニ紅葉也又

故ニト云レト桐葉ハ紅葉セシト和漢通用ノ秋季

ナリ物ニシテ我家ノ自名名遣ハ新字俗字ノ二論

ヨリ古今ノ兩用モ正諄ノ二様モ能證ハ例ノ俗習ニ

從テ今日ノ用ヲ違スヘキナリ

椎裡栢

御筆ノ椎下ニ紅葉セヌ木ナレ氏推トハカリモ秋  
ナリ或ハ葉モ木モ秋ナリト云テ秋ニ用ル細  
ヲ釈セス然レハ栢トハ遠テ彼ヲ類トシ是ヲ秋ト忠  
百世ノ惑トハ世謂ナリ○今按スルニ推モ裡モ栢葉ノ  
名類ハ全ク紅葉ノ沙汰ニ非ス落ルトカ拾フトカ  
實ヲ結テ秋ナルヲ運、實ヲモ其ナリト云レハ古抄ハ  
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新茗高麦

世式ハ例自貴散ナリ奈何トナレハ其冬ニ  
テ食フハ秋ナル前後ノ働ヲ貴テナリ去レハ  
茶ヲ摘ムハ春ニシテ新茶ハ頃次ニ夏ト成セシ速

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給フ不時ノ誠モ其時其物  
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好カレトフ

初鴨

世名ハ全ク新撰ナリ或ハ貴散ニ加減トモ云ハ  
○今按スルニ奉膳式ニモ「鴨ト並ナカラ貴スル  
所ハ秋冬ノ差別ナリ去氏見向ノ姿情ヲ論セ初鴨  
ト云ハ凡雅ヲ思ヒ初鴨ト云ハ凡味ヲ思フ多シ天眼  
天目ト云ヘリ辟言ハ初ト音ニ喰ハ凡味ヲ先ニ思フヤ  
鴨ノ冬ナルハ勿論ニテ初字ヲ添テ秋ト成スヘケン

野宮別

世式ハ禁中ノ行事ニテ古式ニ世類ハ教多ナリト多ハ  
連歌ノ用ニシテ他語ノ平話ニ多用ナラシ然レ他語

ハ下子上達ノ道ナレハ名ニハ等ノ一各ヲ奉テ公家  
殿上ノ例ト成サハ四季ニハ類ノ各ヲ送<sup>ス</sup>来<sup>リ</sup>テ催<sup>シ</sup>  
曲節ニ用ミトナリ去<sup>ル</sup>ハ野宮ハ送<sup>ル</sup>来<sup>リ</sup>ト賀<sup>ス</sup>茂<sup>ク</sup>トニ在リテ  
伴勢ノ齋宮ニ移リ玉<sup>フ</sup>ヲ野宮ノ別ト云<sup>フ</sup>リト去<sup>ル</sup>ハ  
羅<sup>キ</sup>旅ニモ哀傷ニモ非<sup>ズ</sup>増<sup>シ</sup>テ意<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>常<sup>ニ</sup>モ非<sup>ズ</sup>テ哀  
ナル所<sup>ト</sup>モ多<sup>ク</sup>ケ<sup>レ</sup>ハナリ

○冬之部

枯尾花 <sup>此</sup>名ハ古今ニ論<sup>リ</sup>テ秋<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>ク冬<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>ト枯<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>  
結<sup>テ</sup>ハ冬<sup>ト</sup>定<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>名<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>枯<sup>ル</sup>ラ冬<sup>ト</sup>成<sup>シ</sup>

名<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>散<sup>ル</sup>ラ秋<sup>ト</sup>成<sup>セ</sup>ル散<sup>ル</sup>ハ冬<sup>ト</sup>成<sup>セ</sup>ルナキ  
故<sup>ナリ</sup>然<sup>レ</sup>ハ名<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>草<sup>モ</sup>其<sup>ノ</sup>例<sup>ニ</sup>シテ枯<sup>ル</sup>尾<sup>花</sup>ハ決<sup>シ</sup>テ冬<sup>ト</sup>  
残<sup>系</sup> <sup>此</sup>亦<sup>ハ</sup>諸<sup>抄</sup>ニ論<sup>リ</sup>テ傳<sup>ハ</sup>筆<sup>ハ</sup>重<sup>陽</sup>ニ残<sup>リ</sup>テ秋<sup>ト</sup>  
ナリト云<sup>レ</sup>ト桃<sup>モ</sup>苜<sup>モ</sup>其<sup>ノ</sup>類<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>然<sup>レ</sup>ラ和<sup>歌</sup>  
ノ公<sup>亦</sup>ニ十月<sup>五</sup>日<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>残<sup>系</sup>宮<sup>ト</sup>云<sup>レ</sup>ハ宮<sup>中</sup>字<sup>ニ</sup>  
ニ及<sup>ハ</sup>スレテ決<sup>シ</sup>テ冬<sup>ト</sup>定<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>等<sup>ヲ</sup>加<sup>減</sup>ノ用<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>  
ハシ残<sup>字</sup>ハ總<sup>テ</sup>残<sup>花</sup>ノ例<sup>ニ</sup>效<sup>シ</sup>

作<sup>鳥</sup> <sup>此</sup>亦<sup>ハ</sup>全<sup>ク</sup>當<sup>用</sup>ナリ古<sup>抄</sup>ニ秋<sup>ニ</sup>シテ雁<sup>鳥</sup>部  
ニ入<sup>レ</sup>ト山<sup>雀</sup>日<sup>雀</sup>ノ類<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>テ作<sup>鳥</sup>ノ  
物<sup>ニ</sup>連<sup>テ</sup>ス民<sup>家</sup>ノ軒<sup>ニ</sup>割<sup>テ</sup>防<sup>ヲ</sup>傳<sup>ヒ</sup>中<sup>棚</sup>ニ

遊ユに声コエノ清スく久クハ殊ト更ニ寒シ増テ春ハ歸ル汝ニ女  
モ見ミ子コハ決シテ冬ト定シ也等ヲ姿シ情ノ例ト云フ

木兔

木兔ミツツモ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入レト後鳥  
ニモ非ス名也鳥ニモ非ス増テ鳴クノ物也實ニカラ厩ト厩  
一ハ故ニトヤ然ラハ二季ノ加減ト云フ夜ノ鳴ク鳥ノ畜用ト  
云フ決シテ冬ト定シ也鳥モ部類ナカラ新ト成セル  
ニ用アリテ也等ハ古抄ノ又覺ト称スシ

鴉

鴉カ鳥ハ倭名ノ火燒ナリ然ルラ古抄ハ渡鳥ノ部ニ入レト  
ト其名モ其言ノ朝霜ノ氣色ト云フ秋ニ小鳥  
ノ多クハ又之部ニ跨リテ也名モ加減ト云フナリ

鳥

鳥カ鳥モ論セハ新撰ナリ海軍ニ鴉ト都鳥トラ  
如クテ新式ニ雜ト云フ歌道ノ秘古ナリト至四拾テ例ニ  
其故ヲ曉サ子ハ今日ノ用ニ立難シ〇今ハ梅スニ路鳥モ鴉  
モ水ニ甘度冬ノ差別モ通レハ果ラ結スハ雜トモ云フケ  
ト下鳥ハ鳴声モ寒氣ニテ俗語ニ搔井氏云フナレ  
ハ能諸ニ各目ノ自在ヲ称シテ冬ニ用アラハ冬ニ  
用キヤ然ラハ路鳥ノ部類ニ勝リテ例ノ雜ト成リ  
季子ト成リテ附合自當用ト云フナリ

鶯子

鶯カ子ハ古抄ニ歸子ヲ結テ冬ト成セレトモ  
鶯子トハ各目モ長ケレハ啼字ナク任冬ト定

レ彼ハ冬至ノ比ヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ニ用

ハナリ増テ尊ノ母鳴ト云ハ子ノ子ニモ及向敷

尾越鴨

レ名ハ俗ヨリ鴨ハ往來ノ道ヲ定テ山ノ尾越  
ヲ越ル故ニトワ然レハ初鴨ヲ秋ト成レ鴨  
ヲ冬ト成セル名ハ殊ニ能諧ノ用ト云レ

綿入棉打

古抄ニ綿ノ夏ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ  
總テ冬ナリト云レト去ルハ附合ノ言アリ綿  
ハ本ヨリ新ニシテ綿ハ綿扱ノ對ナレハ字ヲ添テハ  
冬ト定レ或ハ棉打ヲ秋ト云レト綿ヲ摘ト云ク  
棉ヲ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決レテ冬ト定レ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ

非スト云イ綿ニ海鼠腸ヲ嫌フノ類ハ古今ノ透

ナレハ論ニカハス然ルヲ綿ト木棉トハ附テモ若

カラスト云テ狂虫綿ト木棉トノ類又アレト綿ト棉

トハ異堅切ニテ音訓正法曰ラヌヲ何故ニ附句ヲ

嫌ヌヤ古抄ニハ類アリテ皆々論スルニ暇アラヌ

多ニハ綿ノ一名ヲ舉テ万法ノ例ト成サハ其外ハ

推レテ知キ古又ナリ

山路塔

レ名ハ古来ヨリ論アリテ歎冬ハ山山路ニ  
在ルタレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用事ナレハ頓

テ大和ノ故實ト成レリ然レハ中古ノ式目ニ露塔  
モ露花モ同ク春ニ用タレトモ各ハ例ノ貴貝  
村脩ノ雪ニ結トモ露塔ハ冬ト定レシ然ツトモ  
露花ハ漢ニ賈鴻カ春日雪ノ詩ニ春ト云ハシ  
モ宣ナレト其各ハ指テ能詔ノ用ナシ露花ハ但  
春ニシテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

### 冬瓜

此名ハ能詔ノ自在ニシテ冬瓜ト春ニ喚ビ或ハ  
カモフリト訓ニ喚テ中右ハ總テ秋禾子ト成セリ  
去レト幸ニ冬ノニ子ニリ霜ヲ待テ貴スル物ナレハ  
西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定レナリ

### 雪海

此名ハ俗習ニシテ或ハ加減ト云キナリ此物ハ  
北越ノ各産ニシテ海鳥ノ山石向ニ降積ス  
ル雪ヲ波ノ打浸ス柏子ニテ凝テ海世ト成レリ  
トフ然レニ雪ヲ里ト訓セシハ白ヲ青ト云レニ訓  
ナラン〇ハ按スニ海世ノ各ハ春日夏ト復スレハ  
雪海トシテ冬ト成サハ例ノ爰誤ニ及ハスレテ  
此等ヲ加減ノ當用ト云レシ

### 大根引

此詞ハ冬ノ當用ナリ大根ト略シテ冬自詔ニ  
讀レシ京家ノ大根引ニ效フカラス牛房  
モ同シ各教ナカラ引ト云ハスレテ堀ト云フ其各

ハ秋ト知キナリ○今按スルニ佻諧ノ式同ハ新式ニ據  
ラス古抄ヲヲ遜ス今ノ日ノ世法ニ遠子ハ其ハ座ニ儘  
其時ニ從ヒ其故ヲ論シ其為ヲ明メテ自己  
ノ理ヲ屈ラズ在サシハ其ノ所ヲ一世ノ血双議ト知り  
其ノ所ヲ百世ノ明監ト知キナリ  
車ニ云ケシ式ノ夜用ト始メ節食の公式より  
終メ大根の倍習よりおんを回す余條あり  
て或ハ連系の有用あり 訛諧の可し用とす  
一或ハ古今の遠同とすたり或ハ亦節の  
加減とすあり亦平養をけ式とすたり 千式

一方法の凡例きくんと我とくんと階級首の微中  
を失つと一筆万通の様変よりけ式の序詞  
よつるる達の人とえついでと毒く四も子の  
名れとあつたをと訛諧の誤不誤ト佻諧の  
用可し用しとと角け式と格削より自己のる  
といろきくんと百世の惑とをるに明る

○ 佻諧ノ假名はくひ此事

大和ノ假名遣とすより定永々の物ね  
てし作よりを所法ありたりとやと書に紹巴の

字があるより天文の比北極りありと我らるると  
 世くよひいさねて或を故実とすお抱ありて志お  
 とふと此とき擬字をまき合しあめ假名  
 あるより一庵字の類字の音をとねれい訓  
 あり字やとれい何故に捨れいあめ字は古  
 ららや字書とふともしあめありあめを  
 歌書の抄教奇より例の及印あると故実  
 とも或を口傳とすお抱ありて字とてあめと  
 ともあめいとき法といふ法といふハホハ  
 たり通音より入書とまき合てあめ字あめい

あめいともあめいともなれとあめい物の名  
 下をあめいを調めやうまあめいあめい  
 と此とき假名の剛柔とあるときやちよと  
 へふの軽重よりたこと口傳といふあめい  
 假名遣の平竟と書法の字形と音韻の軽重  
 とけいめ用入るとされいも余をけい例よりあめい  
 但し假名の軽重とて白と黒と野  
 重と黒角と踏より二様と平仄の相紋也今接  
 くらに假名の書法の連能の考よりあめい連音  
 假名からに能階と真名からあめい假名と





と子やを假名し又句と言語とに動く  
動くぬ款ありて物名をよる爲て動ぬ  
ハ鯛鯉のおれといの字せきうハ菜籠の  
おれおれく物名おれと假名するを  
次と書と下はありて菜をおれといと  
まをとおれと見れとせらるぬよひハ  
辰吉の次と書あり籠ハ因ふおの假名  
おれといくを音書の次と書あり但し  
次と書と歌書とよし別とせらるれせ  
おの字をちおれと中るとおれとおれ  
おれとおれとせらるぬと假名する動くと  
動ぬぬをけおれと書ぬおれと言語と動き  
又句をちおれと書ぬとせらるぬとありハ  
のこもくも書しけ例とせらるぬとせらるぬ  
下の五品ハ古書の假名はくハハ散在  
ハ今後まらよなまらんハ編撰とせらるぬ假名  
はくハハおれと又句と言語とに動ぬ動く  
と動ぬぬと動ぬ書ると書ぬぬと動ぬ  
上中下と用ると動ぬと書ぬと急緩と  
或はにせらるぬと書ぬとせらるぬ假名はくハ

おれとおれとせらるぬと假名する動くと  
動ぬぬをけおれと書ぬおれと言語と動き  
又句をちおれと書ぬとせらるぬとありハ  
のこもくも書しけ例とせらるぬとせらるぬ  
下の五品ハ古書の假名はくハハ散在  
ハ今後まらよなまらんハ編撰とせらるぬ假名  
はくハハおれと又句と言語とに動ぬ動く  
と動ぬぬと動ぬ書ると書ぬぬと動ぬ  
上中下と用ると動ぬと書ぬと急緩と  
或はにせらるぬと書ぬとせらるぬ假名はくハ

の半竟と和歌の撰集と武家の軍書  
と假名と直名とをいふなり  
はくまくとオとていふあると其書の用  
あれいと一ゆるしと漢字をいふなり  
ちりりと今此は物ありと万葉假名と  
かきこくうりひらく志と直名とをいふなり  
又二子う二子よとていふれいあといふるは  
とまふはて同類をいふ声の感得をい  
へんよきなりなりといふなりとていふ  
されと能書の家よといふなりとていふなり

○ ○  
と 不  
直名と。假名と。をいふなり  
とていふなり。假名と。をいふなり  
の口流りありといふなりとていふなり  
はくまくと直名とを撰集といふなりとていふなり  
此は假名と直名といふなりとていふなり  
の可憐なる。圓角の二紋は軽重とていふなり  
むれいふ文字なりとていふなりとていふなり  
せくよといふなりとていふなりとていふなり  
よといふなりとていふなりとていふなり  
いふなりとていふなりとていふなりとていふなり  
○ ○  
と 不  
直名と。假名と。をいふなり  
とていふなり。假名と。をいふなり

其花之... 河... 橋...  
 其花之... 河... 橋...

○ 水  
 ○ 花

其花之... 河... 橋...  
 其花之... 河... 橋...

○ 水  
 ○ 花

之中下は用ゆる。その字の中より用ひ  
 りたるあり。あれとあら。あれのれもあれ  
 とら。味りて書にあら。けり。捨る。假名  
 こそし。或る。さる。はら。る。のれも。ま。ま。て  
 づの。さ。ま。と。用。ゆ。り。或。ら。ん。て。ゆ。り。さ。ま  
 ら。も。ん。中。下。と。字。形。さ。ら。り。一。れ  
 と。書。法。の。こ。を。ら。り。や。り。假。名。の。け。き。も  
 り。あ。れ。い。け。お。と。け。例。よ。考。一。し。れ。も  
 ち。け。の。假。名。は。い。い。は。な。は。は。た。さ。ハ。粟。あ。は  
 録。を。の。れ。を。い。う。ら。り。な。も。知。り。し。れ。

○ 一 元  
 ○ 五

之。清。り。て。み。子。あ。れ。例。の。假。議。より。り。一。ま  
 消キズル 杖ツツ 曲カマ 和ワ 實シ 也  
 更カナル 差サ 也 粟アハ 和ワ 實シ 也  
 声コエ 指ササ 或ハ 本ホ 粟アハ 實シ 也  
 東。花。云。え。の。子。を。む。り。論。あり。て。は。の  
 と。や。分。め。あ。り。と。用。え。と。し。編。え。と。し。衣。え  
 と。も。り。や。中。え。と。も。ゆ。り。え。る。し。中。よ。あ。り。て  
 二。音。通。よ。う。な。也。編。え。と。と。ん。て。ゆ。り。の。字。形  
 と。り。い。れ。え。と。と。ん。て。字。比。訓。也。或。ら。ん。え  
 と。り。ふ。各。あ。れ。と。と。ん。て。味。り。て。假。字。あ。り。ん



蓮ニ云世ノ假名はるひとらよありて古名  
 はるひとらありてはるひとら新制あり  
 けりを假名直名はるひとらありて古和詞  
 助語をやうけて能讀の文章北中四條と  
 あたりきり△之後まらたけウシセウ温觸を稱し庵  
 の遺稿よりりて彼より五種の一字もむ  
 え祿甲戌の秋もや伊賀北西禁庵よりりて  
 後様書裏の撰集のほりてに夏享のなめ文  
 稿とよくりて十拿篇の點換ありてに  
 前様裏の直名文より幻住庵記よりり

スミヤク 龜玉楚の文論ありて略云我が国に能讀  
 の文章と和歌連音とありて家と格  
 あんすとよふと漢と四六の文にありて拍子  
 一休と隋秘言ありんたくれの能讀の手話あり  
 例の古名名からあんをまよふの比聖也  
 形容と上をトシホウ鮫の羽の如く下をトシキリ鑄錦の版  
 と似たりとを和歌にもありて連音もあ  
 ると海へ新島の原中袂衣の豎あり詞と  
 似し似きんたくれも今此文論と直名名とら  
 返り返りぬの差ふあれいきてい可し自々詞

ありとも假名とてしる真名とる等々一のつ  
大和の文とつらむ今論する幻住庵の記と古語  
の詞とかりあつて條文に起る字ははねの雲の  
異世東南より一とてしつれ用の用とはせし  
云思思は楚北より一とてし余の志練の指とせし  
又はまきしとあつてとて思とてする早計の  
人北悔あつて嘆や自思のおろそかの物とて  
人をさしおつては蹟と先とてしる事あるは  
今より假名真名のをくらひくらひおろそか  
とて万葉の假名おろしとてし我より一とて

かきおろそかとてしおろそか様とてしる  
あつて楚波のつらむとてしる楚換とてしる  
と我々の文章と論とて湖南より月日  
とはして百世の文格とて耻きんとして  
まにわりの遺稿の大任ちりてわくと又秘の  
秘訓とてしる一とてしる稿のあけくあつて  
年をた月よ祖系に楚波とてしる  
楚人の武陵とてしる文章の文故の先師  
の點換とてしる一とてしる楚波の  
とてしる楚波とてしる武洛

の古老のやいふをいふもの様もよきものごとく  
例の字もよきもの字もよきもの様もよきものと  
や人よりやまをいふに書林といふものもよきもの  
よきもの儒師の遺書もよきものありてよきもの  
佐といふものもよきものありてよきもの奥<sup>ケラ</sup>麻<sup>ハイ</sup>といふ  
遺福といふ下北密議といふものやまよきもの  
廣狭といふ御種といふものやまよきもの様もよきもの  
ひろからい書書といふものやまよきもの編<sup>ニ</sup>実<sup>ニ</sup>といふもの  
まよきもの遺書の遺書といふもの例のおよび  
おそれまよきもの今北式目の再撰といふこと接い

はいて密議といふものやまよきもの様もよきもの  
はいて密議といふものやまよきもの様もよきもの  
と直名といふものやまよきもの様もよきもの  
格といふものやまよきもの様もよきもの



貞吉式目之終

